

今月7月4日から6日に渡って、岩手県内において「復興を推進する交流観光～復興の現状と観光が果たす役割～」をテーマに標題の大会が開かれました。

私は東日本大震災以来、東北へは4度目延べ15日となりました。30数年振りに訪れた浄土ヶ浜は昔の荘厳さは無くなって観光の岩島となったと言う感懐を持ったのは観光地のあり方の難しさかなと思いました。

2日目のパネルディスカッションに、釜石市根浜海岸の民宿、宝来館の女将岩崎さんが大変な被害を受けながら、救済、復興の先頭に立っておられる実情をパネラーとして語ってくれましたので(この紙面に限りもありますので)そのお話を書かせて頂きました。

根浜海岸は、釜石から北上して三陸特有の崖と山の半島の島谷坂トンネルでくぐり、更にもう一つ小さな崖山半島の北側の大槌町に近い「鵜住居」の海岸で「東の沢、西の沢」と言う2つの大きな沢を持った津波には危険な地形を持って居ります。私は富士食品創業時には竹輪やかまぼこ、イカ等を石巻から山田湾まで買い付けに歩きましたから、岩崎昭子さんは「奥尻島、阪神大震災」を見て2階建ての民宿を4階建てのビルに建て替え、民宿の景観としてはふさわしくないと大変後悔をしましたが、今となれば震災の教訓を生かしてやっぱりよかったと思っております。

「釜石の奇跡」と言われた釜石の小中学校生徒2,960人の99.8%の子供達が大津波から逃れた事は、日頃から小中学校合同の避難訓練を続けており、地震発生と共に東中学校の副校長が「みんな逃げろ!必ず生きるんだぞ!」と大声を掛け、近くの鵜住居小学生たちも合流して逃げました。途中で幼稚園児達を待ち合わせて園児達を中学生たちが背負って山へ駆け上がって行った、合同訓練の成果があったから奇跡が起こったのです。宝来館も2階まで津波が襲ってまいりましたが、3階以上は大丈夫でしたので西の沢の人達は宝来館へ、東の沢の人達は高所にある墓所へと非難して助かりました。押し流された消防団員も奇跡的に返し波によって押し戻され、血だらけになって宝来館へと戻って来られました。市内へ出ていた人達も雪山を超えて宝来館へやってきました。暖かい風呂が生きていたから大変役に立ち喜ばれました。



私は大災害は千年に一度だと思っています。

福島の方には申し上げにくいですが、私は大津波によって生まれ住んだ村が一瞬にして消えた時、負けてたまるか!この土地は絶対に捨てられない!逃げてはダメだ!と思いました。釜石の子供達も言っています。「この土地は自分達の故郷だ!」と子供達の故郷を大人達が捨て、逃げる事は出来ないからです。

縄文以来、三陸で生きて来た先人、先輩達があらゆる苦難を乗り越えて守って来てくれたこの故郷を決して捨ててはならないと私は思っています。

私達は今この土地を離れている人達がやがて帰ってくるまで頑張る努力を続けます。

全国の皆様、この釜石の街を死者を葬う街にしないでください。是非釜石へ訪れて下さい。私達は震災によって数えきれない多くの友人、家族を失い、どん底を生きて参りました。しかし不思議にその真っ暗なはずの日々の思い出は辛かったことより楽しかった、懐かしいと言う思いがあります。多くの人達の温かい人情、絆があったからであります。私達が明るい希望を持ち続け、頑張る生きて行くためにも是非岩手へと今後も続けてお越し下さい。